

SPECIAL EDITION ★ NOTOism

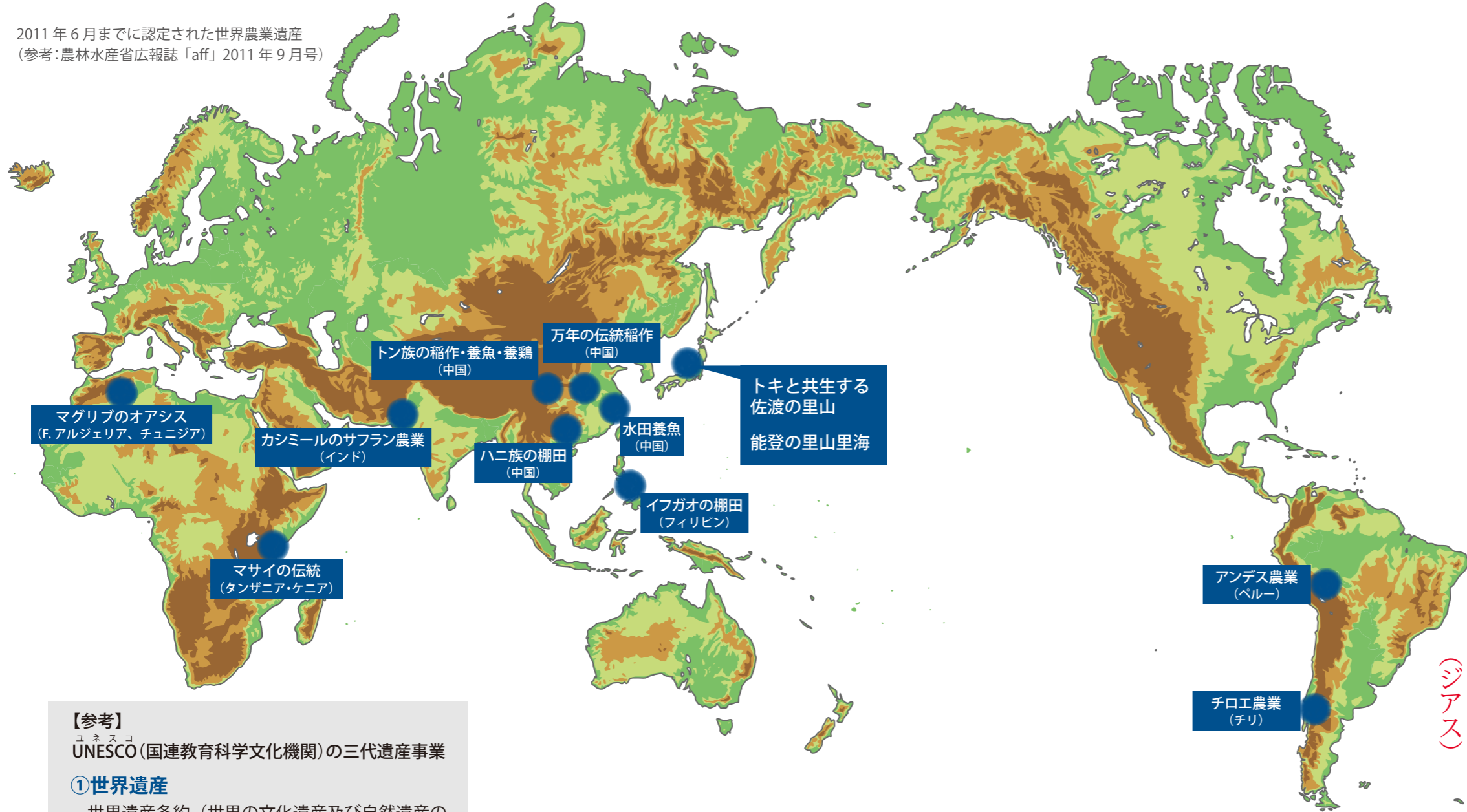
# 能登イブム

～世界農業遺産から「能登の暮らし」を考える～

昨年6月、能登地域4市4町に広がる「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定された。里山里海は私たちの暮らしそのもの。能登の暮らしに国際的な価値があると認められたのだ。

なぜ能登なのか？世界遺産と何が違うのか？これからどうなるのか？疑問をひもといて、いつも見る何気ない風景や当たり前暮らしを見つめ直してみよう。きっと「能登らしい」生き方が見えてくる。





# 世界農業遺産への道

世界農業遺産(GIAHS)は、国連食糧農業機関(FAO)が2002年から取り組むプロジェクト。世界農業遺産とは何か。そして、認定された能登に何が求められているのだろうか。

Globally・・・世界的に  
 Important・・・重要な  
 Agricultural・・・農業の  
 Heritage・・・遺産、資産  
 Systems・・・システム

## 世界農業遺産とは

地域の環境を生かした伝統的農業には、食糧として農作物を生産すること以外に、生物多様性や農村景観、農村文化の保全など、さまざまな役割がある。しかし、生産性を重視する農業の近代化が進むと、その多面的役割が失われ、てしまう恐れがある。

次世代に継承すべき重要な農業や生物多様性を有する地域を守るために、FAOが一体的なシステムとして認定するのがGIAHS。日本では世界農業遺産と呼ばれる。

## 先進国初の認定へ

GIAHS発足当初からFAOと連携・協力していた国連大学は09年、地域特有の多様な生きものを育んできた日本の里山に着目。関係者にGIAHS認定を働きかけた。

10年8月には佐渡と能登がGIAHS候補地に選定され、羽咋市以北の4市4町は



2011年6月17日、能登空港でオープニングイベントが開催され、地元関係者にGIAHS認定証が披露された

「能登地域GIAHS推進協議会」を設立した。協議会は、農林水産省、国連大学、石川県、金沢大学の協力を受けて「能登の里山里海」の世界農業遺産認定をFAOに申請。

11年6月11日、中国北京で開催された「GIAHS国際フォーラム」で協議会長の武元文平七尾市長(当時)が国内初の認定証を受け取った。

申請を支援した国連大学の永田明氏は11年12月に中能登町で開催されたワークショップで「能登にある農業遺産の一つ一つを見ると『世界的に重要』とは言えないが、能登

半島約19万畝には山・里・海と農・林・水にわたる多彩な農業遺産があり、それらを総合すると間違いなく『世界的に重要』な農業遺産。だからこそ能登全体が一つにまとまることが大切」と語った。

## 生きている遺産

世界農業遺産と似た言葉にユネスコ(国連教育科学文化機関)の世界遺産がある。世界的に貴重な遺跡や建造物、

原初的な自然などを登録するもので、日本でも世界文化遺産に12地域、世界自然遺産に4地域が登録されている。

貴重な不動産をそのままの形で残していく世界遺産に対して、世界農業遺産は「生きている遺産」と言える。

地域の人たちが、時代や環境の変化に適応しながら伝統的農法や知識を実践していくこと、地域を活性化して持続可能な形で「進化」していくことが求められている。

## 【参考】 UNESCO(国連教育科学文化機関)の三代遺産事業

### ①世界遺産

世界遺産条約(世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約)に基づき「世界遺産一覧表」に記載されているもの。3つのカテゴリーがある。

- 文化遺産: 顕著な普遍的価値を有する記念工物、建造物、遺跡などが対象。745件。
- 自然遺産: 顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息・生息地など。188件。
- 複合遺産: 文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているもの。29件。

### ②世界無形文化遺産

無形文化遺産の保護に関する条約に基づき「代表一覧表」に登録されたもの。「奥能登のあえのこと」は2009年に登録。

### ③世界記憶遺産

歴史上重要で、後世に伝える価値がある文献、絵画、音楽、フィルムなど。

# 里山里海の価値

自然は人が手を加えることで多くの恵みと生きものを育む。里山里海は人と自然が相互に関係し合い、維持されている場所。国土の約4割を占めると言われる里山の中で、なぜ能登が世界農業遺産に認定されたのか。認定の立役者の一人、あん・まくどなるどさんに「能登の里山里海」の価値を聞いた。



## ローカルからグローバルへ

「これまで地道に里山里海を維持してきた能登の皆さんに感謝しています」と話すあん・まくどなるどさん。国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長として、北陸農政局のプロジェクトチームと共に農業遺産認定へとつなげた立役者の一人だ。

「里山と里海が密接につながっている能登は、世界から注目されています。農林業と水産業はこれまでFAOでも別々に考えられていました。谷本知事の発表を聞いたFAOの水産業担当者が『これからは農林業と水産業を一緒に考えていきたい』と感銘を受けるほど能登の里山里海はグローバルに広がっています」

## ため池が育んだ文化

日本中に存在する里山地域の中で、なぜ能登が世界農業遺産に選ばれたのだろうか。

「ため池を中心にした農業システムが1400年以上続

いてきた能登は、祭り、食文化、伝統文化、景観がとても豊かで日本のトップランナーと言えます。

特に『祭り』の意義や役割を考えると、祭りがため池と密接な関係にあることが分かります。点在するため池の周りに集落が発展した能登では、水争いなどが少ないため他の地域との交流が比較的少なかったと考えられます。祭りが小さな集落ごとに数多く行われることや初対面の人間までもてなす『ヨバレ』の文化は、ため池文化とつながっていると思います。さらに、能登の祭りは『保存』されているのではなく、今も生き生きと地域に存在しています。

能登には自然界と人・文化とのつながりが多様な形で生きたまま残っています。能登の文化が生きていることが、『動的農業システム』であるジアスに認定されたのです」

## 持続可能な未来を

20年ほど前から能登を訪れているあんさん。今後も里山

里海の研究者の一人として能登と関わってきたいという。

「ジアス認定以前、能登の話題は過疎化や高齢化など『能登の問題』が多かったように感じます。マイナス面を無視してはいけません。前向きな姿勢で課題解決に取り組むことが大切だと思います。認定がそのきっかけになったのではないのでしょうか。

4市4町の皆さんが『持続可能な未来』を一緒につくっていく中で、今後の課題は、より環境保全型農業や生物多様性を育む農法を推進していくことだと思います。

第1次産業のつながりをもう一度つくっていくことも大切です。昔のような、人間活動の連携の中で資源が管理される仕組みを、みんなで作って新しくつくるのができれば、能登はもう一つの転換期を迎えると思っています」

世界中の農山漁村を知るあんさんから能登へのエール。能登に住む私たちがしっかりと受け止め、前に進んでいきたい。

### 【あん・まくどなるど】

カナダ生まれ。プリティッシュ・コロンビア大学在学時、熊本大学に1年間留学したのち、農山漁村のフィールド・ワークに従事。国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長を経て、現在上智大学大学院地球環境学研究科教授、慶應義塾大学特任教授、石川県世界農業遺産アドバイザーなども務める。著書に『田園有情』、『気候変動列島ウォッチ』ほか多数

## 里山里海の地域資源

### 【稲のはぎ干し】

刈り取った稲を「はぎ」にかけて天日干しする作業。青い稲が黄金色に変わるまで約2週間、自然乾燥させる。時間をかけて乾燥するため割れ米が少なく、さらに茎と葉の養分が穂に伝わるため味も良いとされる。

能登の秋の風物詩と言われるが、機械化の流れの中でその風景を見ることは年々減少している。



あん・まくどなるどさん

# 文化の継承

さまざまな項目が総合的に評価された能登の里山里海。評価項目を能登町に当てはめると「伝統技術、文化・祭礼、里山景観」が町の特徴として見えてくる。文化を継承し、地域づくりに生かす取り組みを能登町教育委員会事務局の新出直典さんに聞いた。



## 能登は伝統文化の密集地

「キリコ祭りやあえのことのような広範囲に広がるものから、その地域にしかない特徴的なものまで、能登半島は狭いエリアの中に伝統文化が密集しています」

町教育委員会事務局で文化財を担当する新出直典さんは能登の文化的特徴を語る。

「これだけ祭りや文化が生活の中に溶け込んでいる地域は、全国的に珍しいのではないのでしょうか」

新出さんは岐阜県出身で移住者でもある。能登の文化に触れる生活は、驚きの連続だったという。

「能登町は能登半島の中でも特徴的な伝統文化が色濃く残る地域。そしてそれを継承していかうとする地域の人たちの意気込みは、世界農業遺産をきっかけにさらに強くなっていきます。伝統文化を守ろうとする地域を応援しながら、継承しやすいような環境と一緒に整えていきたいと考えています」

能登町の主な地域資源リスト

分類	地域資源
伝統的な農林漁法と土地利用	稲のはざ干し、棚田、谷地田、用水・ため池など
多様な生物資源	ホクリクサンショウウオ、ハッコウトンボなど
優れた里山景観	茅葺き、白壁・黒瓦の家並み、農村風景など
伝えていくべき伝統的な技術	合鹿椀、久田和紙、炭焼き、能登杜氏など
農耕にまつわる文化・祭礼	あえのこと、キリコ祭り、アマメハギ、イドリ祭り、小木とも旗祭りなど
里山里海の利用保全活動	農家民宿(春蘭の里)、グリーンツーリズム、エコツーリズム(鉢伏山)など

能登町教育委員会作成資料から

## 景観を守る意識を

世界農業遺産に関連する能登町のもう一つの特徴は『日本の原風景』だと新出さんは強調する。

「能登は『日本の原風景が残る』と言われるますが、その中でも、特に柳田地区は昔ながらの土地利用が今も受け継がれている貴重な地域。柳田には、ため池や大規模な用水が数多く残っていて、町は現在その調査を進めています。見慣れた景観の歴史を明らかにすることで、地域を挙げて

景観を守っていく意識が高まるものと期待しています」

## 『点』を『線』に

本年度から実施する『特色ある公民館活動』事業では、半数以上の公民館が世界農業遺産に関連する事業に取り組みなど、自分たちの地域を見直し、地域を盛り上げようという機運が高まっている。

『点』として存在する地域の文化などを『線』として結ぶことで相乗効果を生み出し、町の活性化につなげたい」と決意を新たにしている。

能登町は、里山里海に育まれた伝統文化が色濃く残る地域。

## 里山里海の地域資源

### 【あえのこと】

奥能登一円の農家に古くから伝わる農耕儀礼。12月5日、田んぼから田の神様を迎え、山の幸、海の幸でもてなして収穫に感謝。2月9日には同じようにもてなした後、田んぼに送って豊作を祈願する。家の主人は、田の神様があたかもそこにいるように振る舞う。09年にユネスコ無形文化遺産に登録される。



能登町教育委員会事務局  
新出直典 学芸員



# ジアスの可能性

世界農業遺産の中心は「農業」。農業が営まれることで文化や景観、生物多様性が育まれてきた。認定を受けて、能登の農業が活性化するのが注目されている。世界農業遺産の可能性について、たいたすけ 県里山創成室の渡邊泰輔室長に聞いた。

## 『能登棚田米』の可能性

「能登の活性化は、1次産業の振興なくしては成り立ちません」と話す渡邊さん。石川県が里山を生かした地域づくりを進めるために昨年4月に設置した『里山創成室』の室長として世界農業遺産の関連事業を取り仕切っている。

「能登の農業の中心である『米』は、能登全体で同じ価値観を持ってブランド化できません。その大きな一歩が奥能登4つのJAが連携して取り組む『能登棚田米』。これは世界農業遺産認定を受けて、行政主導ではなくJAが主体的に取り組んでいることにも価値があります。農薬・化学肥料を減らす『環境保全』も取り入れていることで消費者にも分かりやすく、ブランド米として確立するでしょう。今後は棚田米が能登全域に広がったり、能登米の象徴となつて能登米全体の価値を高めたりする可能性がありません。まさに『地域のため』になるブランド化です。」

地域特有の農作物には、それぞれの特徴を生かした『6次産業化』で付加価値を高める手法があります。県には『いしかわり山創成ファンド』があり、うまく活用して『地域のため』になる商品開発を進めてほしいと思います。ファンドの目的の一つは『生業』の創出です。能登で生活できる基盤づくりを支えたいと考えています」

## 価値観の転換を

渡邊さんは『地域のため』を強調する。能登の将来のためには『地域という目線』が欠かせないからだ。

「能登に求められていることは、いかに地域を維持していくかということ。ただ能登が残るだけでは意味がなく、これまで能登の人たちが作りあげてきた価値観を保ったまま維持していくことが重要です。そのためにも、まず能登に住む人たちが『能登の価値』に気づき、『自分たちのやってきたことがすばらしいこと』であるという価値観の

## (参考) いしかわり山創成ファンド

※総額 53 億円、運用期間 5 年間 (H23.5.31 設置)

項目	補助率	内容
生業の創出	3/4 (3年以内)	地域資源の発掘や新たな商品開発
イベント支援	3/4 (1年目) 2/3 (2・3年目)	里山里海地域を元気にするイベント
資源循環モデル	2/3 (2年以内)	里山エネルギー資源の有効利用
里山景観の創造	ソフト 10/10 ハード 1/3	里山集落全体の景観創出

※ 25 年度公募は 5 ～ 6 月ごろを予定

転換が必要」と訴える。

「来年春には能登の取り組みを世界に発信する国際会議が能登で開催されます。能登にはそれだけの『実力』があるということです。」

最初の1年はご祝儀期間であり、お祭りのようなものがありました。これからは能登が元気に良く続いていくために、良い地域をつくっていく活動に軸足を移していきます。主役は地域であり、そこに暮らす人です。県と4市4町が一緒に、地帯を盛り上げるために皆さんを応援します」

1次産業の活性化なくして、能登の活性化は成り立たない。

## 里山里海の地域資源

【春蘭の里】能登町宮地・鮭尾地区を中心とした農家民宿群。平成8年に地域住民が立ち上がり「春蘭の里実行委員会」を設立。里山景観の保全と交流人口の拡大で地域再生を目指す。農家民宿は現在30軒を超え、23年度の宿泊数は述べ5千人。黒瓦、白壁の家並みは石川県の里山景観維持重点地区に指定されている。



石川県里山創成室  
渡邊泰輔 室長